

第4回 岡崎地域活性化ビジョン検討委員会 摘 録

日 時：平成23年3月8日（火）午後6時30分から午後8時40分

会 場：京都市国際交流会館 特別会議室

出席委員（敬称略）

委員長

もんない てるゆき
門内 輝行 京都大学大学院工学研究科教授

副委員長

たかぎ ひさかず
高木 壽一 岡崎地域活性化懇談会座長

委員

（五十音順）

うえむら のりこ
上村 憲子

市民公募委員

おおしま さちこ
大島 祥子

一級建築士・技術士(建設部門)、スーク創生事務所代表

おおた せつこ
太田 節子

神宮道商店街組合会長

かしはら やすお
柏原 康夫

(株)京都銀行会長, 京都商工会議所副会頭, (社)京都市観光協会会長

さわべ よしのぶ
澤邊 吉信

岡崎自治連合会会長

なかじま せつこ
中嶋 節子

京都大学大学院人間・環境学研究科准教授

なかにし かずや
中西 一彌

市民公募委員

にしむら たかし
西村 隆

京都市総合企画局長

はまさき かなこ
濱崎 加奈子

伝統文化プロデュース連REN代表

ふじい ようこ
藤井 容子

京都市未来まちづくり100人委員会(岡崎ホールディングス),ライター

ほんだ かずお
本多 和夫

平安神宮禰宜

みなみ たかあき
南 隆明

京都商工会議所観光産業特別委員会委員長, 京都駅ビル開発(株)相談役

むらい やすひこ
村井 康彦

京都市美術館長

もりもと ゆきひろ
森本 幸裕

京都大学大学院地球環境学堂教授

以上16名

1 開会

事務局（総合企画局市民協働政策推進室プロジェクト推進第二課長 三科）

ただ今より第4回岡崎地域活性化ビジョン検討委員会を開催させていただく。委員の皆さまにおかれては御多忙の中、御出席いただき御礼申し上げます。本日の委員会は公開となっており、報道席及び一般傍聴席を設けているので御了承願いたい。

本日の議題は、「パブリックコメントの結果と岡崎地域活性化ビジョン（案）のまとめについて」である。

それでは、ここからは門内委員長に進行をお願いしたい。

○門内委員長

ここから私が進行をさせていただく。では早速、議題について資料説明をお願いする。

2 議題

○パブリックコメントの結果と岡崎地域活性化ビジョン（案）のまとめについて

——（説明 事務局 総合企画局市民協働政策推進室岡崎地域活性化担当部長 奥）——

3 意見交換

○門内委員長

パブリックコメントを通して多くの方から御意見・アイデアをお寄せいただいたことに、ビジョン策定に向けて大きな手ごたえを感じている。

パブリックコメントの内容は、大きく

（１）御意見の趣旨をビジョン中間まとめに反映できるもの

（２）賛否多数の御意見を踏まえ、本日の検討委員会で重点協議を行うべきもの、がある。

（１）については、事務局報告のあった修正案において既にかなり対応している。まずは、この修正案について御議論いただきたい。また、（２）は、特に多くの御意見が寄せられた「岡崎グラウンド空間のあり方の検討」についてであり、後ほど重点的に議論を行いたい。そして最後に、

（３）これまでを振り返ってビジョン全体について意見交換をしていただき、最終案を取りまとめていきたい。以上３点が、本日の委員会の大きな流れである。まず、事務局から報告のあった修正案について意見交換を行いたい。

（１）ビジョン修正案に関する協議

○藤井委員

13ページのEV（電気自動車）の例示追加についてである。環境負荷の少ない地域モビリティの活用は是非進めたいが、ここでEVだけを例示するのはいかがなものか。

確かにEVは選択肢の一つではあるが、水素やバイオディーゼル、その他将来的な様々な選択肢の可能性を踏まえると、EVだけを例示追加するより、中間まとめの包括的な記述に戻した方がよい。

○澤邊委員

ビジョンの別の項では「歩いて楽しい岡崎」を掲げている。その本質は公共交通機関で来訪していただき、岡崎一帯を歩いて楽しんでもらいたいとの狙いであろう。

また、環境負荷の低減であればもっと違う交通手段の選択肢もあるだろうし、自動車（EV）という例示は外すべきだと思う。

○門内委員長

確かに「歩いて楽しい」ということは、全体の大きなコンセプトの一つであり、京都市の重要な政策にもなっている考え方である。

○森本委員

前回委員会で、ビジョン全体を貫く理念として環境モデル都市に相応しい姿勢を示した方がよい、との意見を述べた。この点、7ページ「将来像」の「山紫水明の杜」のところで「未来への持続性～環境未来都市」が盛り込まれており、良くなった。

他の箇所でももう少し、こうした姿勢を強調できたらと思う。例えば、国の環境政策では「低炭素」「循環型社会」「自然共生」の3つのコンセプトが柱である。このキーワードを15ページの方策のところに盛り込めないか。具体文案はお任せするが、例えば、循環型社

会については、一般的には工業資源の再利用・再資源化などがイメージされるが、疏水がある岡崎は水の循環がテーマとなりうる。雨水利用なども考える時代が来ている。機械仕掛け、テクノロジーで対応するのではなく、自然を生かすという思想も入った方が良い。

○門内委員長

京都市の新しい基本計画が出たがそこでも「低炭素」などのキーワードが盛り込まれている。森本委員のお知恵もお借りしながら、上位計画との整合も図り、修正を加えたい。

○中西委員

知名度向上の方策について意見を述べたい。修正案にある駅・バス停名だけでなく、集客力のある施設のいくつかにも「岡崎」と付ければ、「岡崎」の名前が世界中のメディアに載るようになるのではないかと。そうした趣旨も加えていただきたい。

○中嶋委員

修正案を拝見し、パブリックコメントで寄せられた意見が具体的だった影響もあるが、抽象的な目標の中に具体的な記載があり多少違和感を覚えた。例えば14ページ、夜の賑わいの中に「街路灯のデザイン検討」など具体例が出てくる。もちろん各事業の中で検討されるべき項目ではあるが、細かいことしかしないのかという印象を与えかねない。もう少し包括的な書き方としてうまく工夫できたら良いのだが。

また、11ページの重要文化的景観の記述に関連して、世界遺産登録は本当に目指すのか確認したい。世界遺産のためにやらなくてはいけないことと、岡崎地域活性化のためにやることは必ずしも同じではない。対立することもあるだろう。重要文化的景観を目指す方向については問題ないと思うが、世界遺産登録については良く考える必要がある。

○門内委員長

具体論と抽象論の話は、全体にも関わるので、他の委員の方からも議論いただきたい。また、近々に取り組むべきこと、長期的に取り組むべきこと、というような関係も出てくる。世界遺産登録については、事務局から補足いただきたい。

○奥部長

世界遺産登録には、色々と課題があること、またハードルが高いことは認識している。パブリックコメントで「世界遺産を目指すくらいの心意気で取り組んで欲しい」との市民意見がいくつかあり、長期的にはそうした展望があっても良いのではないかと趣旨で盛り込んでいる。

○門内委員

そうした趣旨もあり「世界遺産登録も視野に入れ」という表現になっている。

○濱崎委員

私は「夜の賑わい」という言葉が気になっている。多くの方に岡崎を訪れていただくのは良いことだが、今の岡崎にふさわしい、上品で落ちついた、しっとりしたイメージは継承したい。

○南委員

12ページ「文化芸術，MICE拠点としての機能強化」について，以前から意見を述べているが，京都の都市インフラとして脆弱であるコンベンション機能の強化を図ることが京都全体の発展につながると思うので，是非実現していただきたい。

また，みやこめっせの地下にある「伝統産業ふれあい館」は存在自体が知れ渡っていない。積極的な活用・PRだけでなく，もっと多くの人が訪れやすいよう地上1階部分に場所を移すなどの検討も必要ではないか。

○太田委員

具体的な話になるが，トイレが足りない。ひどい時には，喫茶店にもトイレだけ貸して欲しいと観光客の方が入ってくる。公共トイレは汚いから，という理由だけで利用しない人もいと聞く。何とか改善が図れないか。

それからペットのトイレ対応の問題もあると聞く。どこもコンクリートで固められてペットがトイレをすところがない。わずかに残った動物園とか美術館の桜・芝に集中するので，すぐ枯れてしまう。また，歩道も一部分だけが汚くなってしまう。パブリックコメントでは，ドッグランの提案などもあったが，実現すればペットを連れて利用する人も増えるだろう。

○門内委員長

観光においてトイレの問題は重要である。

○大島委員

濱崎委員から指摘のあった「夜の賑わい創出」だが，確かに「賑わい」というと，人によって想像する内容が色々異なってしまう。「夜の演出」などと修正するのが良いのではないか。

私の関心は，今後このビジョンをどう進めていくのかという点である。スケジュールと方策のウエイト付けが大事である。各方策を満遍なく取り組んでしまっただけでは，結果的にそれぞれの個性を打ち消すことになってしまう恐れもある。どこに力点を置くかということが重要である。

また，パブリックコメントが多かったことは，岡崎に関心が高いことの表れであり，今後の推進において大変心強い。

○本多委員

平安神宮として岡崎のためにどのような貢献ができるか，との視点で考えていた。15ページにある「水辺・山辺の生態系の保全，情報発信」，これを是非やっていただきたい。

○村井委員

市民の方々の御意見を一つ一つ掲載するなど，丁寧に対応している。岡崎地域についての関心が市民の方の間でも強まっているように思う。

前にも述べたが岡崎地域は東山の里山文化圏の中にある。東山は南から北まで連なっている。現在のビジョンでは，岡崎地域をどうするかという点に重点を置いて議論しているが，私は岡崎を東山里山文化のハブにできないかと考えている。15ページに「岡崎地域の総合的な観光案内」とある。分かりやすく岡崎地域を案内することも大事だが，更に北や南の地域へつながっていくような案内もあって欲しい。

また，先ほど，みやこめっせの機能が十分活かされていないとの意見があった。私としても大々的な費用を伴わない形で，何とかうまく活用できないものかと強く感じる。

○澤邊委員

「東山」という視点で御提案いただいた。確かに岡崎地域のことばかり考えていたが、平安神宮も東山の借景があつて、はじめて赤い鳥居や応天門も映えている。もし東山の緑が枯れてハゲ山になったら、岡崎地域の価値も半減するであろう。そうした点も踏まえ、周辺環境も配慮してこのビジョンを検討したい。

○柏原委員

夢のあるビジョンがまとまってきて、非常に楽しみにしている。

ただ、一般市民に公表される時は、できるだけカタカナ用語を減らしてほしい。カタカナ用語は表現が抽象的になってしまい、具体的なイメージを伝えにくい。「ICT」という言葉は初めて聞く市民の方も多いただろうし、できるだけ日本語にするなど表現を再考していただきたい。

○門内委員長

できる限り日本語への言い換え、用語解説などで対応していきたい。

○西村委員

パブリックコメントでは、本当に多くの御意見・アイデアをいただいた。

また「ビジョンへの期待」として18件の御意見・応援もいただいた。「ビジョンに賛成、頑張るって欲しい」「岡崎を日本の元気の素に」という御意見を拝見し、ビジョン策定に携われて良かったという思いと、同時に今後の責任を強く感じた。

これまで様々なパブリックコメントを見てきたが、市民の方のオリジナルのアイデア・提案としてこれだけ多くの意見をいただいたものは記憶にない。こうしたアイデアは、今後、ビジョンを推進していく上でも「宝」となるものである。

○高木副委員長

先ほど「岡崎の知名度向上」に関する御意見があった。「公共交通機関の駅名変更」などが追加修正されているが、一番最初の項目に持ってくるほどの内容ではない。「情報発信」の項目とまとめてはどうか。

また、7・8ページの将来像の五角形の中央のキャッチコピーの修正案について、世界の「京都・岡崎」の midpoint「・」はどのように理解したら良いか。「文化・芸術」は「文化」と「芸術」を同等に併記する意味で「・」を使っている。同様の使い方なら、世界の「京都」と「岡崎」となってしまう。市民的に、また対外的にまだまだ知名度が低いことが理由で修正したのであれば、「世界の人々が集い ほんものに出会える『京都 岡崎』」とした方がすっきりして良い。

○門内委員長

御指摘のとおり「京都・岡崎」で使っている midpoint「・」だけ他と違う意味になっている。京都と岡崎と世界をどう入れるか工夫をする必要がある。

また、パブリックコメントでいただいた多くのアイデア・提案は、最終ビジョン策定時には、アイデア集などとして添付する形も考えられる。

以上ここまでは本日1点目の議論について、およそ御発言いただいた。続いて、岡崎グラウンド空間のあり方について協議を行いたい。

(2) 岡崎グラウンドのあり方に関する協議

○門内委員長

岡崎グラウンドに関するパブリックコメントは80件寄せられている。内容としては大きく6つの要旨に分けられる。「見直し、転用すべき」、「オープンな空間を前提に見直すべき」、「多様なスポーツ・健康増進の場として活用すべき」、「広域避難場所としての維持・活用」、「野球場、テニスコートとして存在すべき」、「ホテル、大規模商業施設反対」である。平成21年度のグラウンドの利用率は、軟式野球では74.4%、テニスコートでは93.6%となっており、多くの利用者がいる状況でもある。

この部分については、修正案を示して議論するのではなく、皆様から忌憚のない御意見をお伺いした上で、最終文案を作成していきたい。

○高木副委員長

岡崎グラウンドは検討委員会、作業部会でも一番多く議論してきたところである。パブリックコメントの件数が最も多かったのも、関心の高さの表れであるとともに、検討委員会の様々な議論を盛り込んだため、読まれた方も色々なこと想像されたのではないかと。誤解のないようもう少し明確に表現した方がよい。

まず第1点は、フェンスで囲まれた野球場、テニスコートは相応しくないということが、多くの委員の意見だった。また、広域避難場所として重要な空間であるという点もはっきりしている。更に、大規模な施設を建設することは物理的に困難であるし、岡崎の良さを活かす広々とした広場がふさわしいというのが共通の認識であった。来訪者の方が憩えるカフェなど最低限の建築は必要かも知れないが、緑豊かな広場を活用したイベント開催や、文化芸術活動など市民の創造的な活動・交流と賑わいを創出していきたい、ということがおよそ検討委員会の方向だった。そうした点をもう少し分かりやすく書いた方がよい。

○森本委員

野球場利用に関連して参考情報を提供させていただく。

京都市内には岡崎地域以外にもいくつか野球場がある。例えば宇治川河川敷にも野球場が15面と多目的グラウンドが1面ある。これは国から河川敷占用の許可を得て使われている。

一方、河川敷の利用については、いわゆる流域委員会で議論されており、河川本来のあり方にふさわしい利用に変えていく、グラウンドとしての利用は余り望ましいものではない、ということが基本的な考え方になっている。現実としては、野球場として利用されている方々がいるので、協議の上で占用許可の更新がされている。

岡崎グラウンドも利用者が多いということだが、例えば岡崎グラウンドがなくなるから、宇治川の河川敷を恒久的に野球場として利用し続けようとの考えが出てくるとしたら、河川利用や環境の観点からは問題になる可能性がある。

少々複雑な話になったが、岡崎グラウンドのあり方については、市全体としてのグラウンド利用や、環境モデル都市として環境の側面からも検討が必要になるだろう。

○中西委員

14ページの説明に「カフェ・レストラン・ショップ」と記載しているのが誤解を生じているのではないかと。あるいは、岡崎地域に必要な機能であるのなら、議論の上で記述を残したら良いが。

○門内委員長

この議論については、野球場・テニスコートそのものの存続の可否と、もう一方で議論されている新たな活用方向としての提案の内容をきちんと検討するとともに、両者は両立可能なかを詰めていく必要がある。

まず、新たな活用方向として大規模な施設を建設するということはこの検討委員会では全く考えていなかった。また「カフェ・レストラン」等と書くと、確かに人によって様々なことを想像されるが、単に広場、オープンスペースがあればそれでいいのかという議論もあるだろう。岡崎にふさわしい広場、オープンスペースのあり方を世界中からアイデアを募るようなことも必要かも知れない。それと並行してスポーツ施設としてどうすべきかと言う議論も必要である。

○藤井委員

パブリックコメントの結果を拝見し、グラウンドに関する意見が多いことが目を引いた。我々が議論してきたことを正確に伝えることの難しさ、また、中間まとめをどのように曲解したらこうした御意見になってしまうのか、というのが正直な感想である。

一方、具体的な活用策の検討に当たっては、当事者を交えた丁寧なすり合わせ・調整が必要だと感じた。現在利用されている方にとっては、今の野球場・テニスコートの役割をどこが担うのかは忘れてはならない視点である。

○門内委員長

この検討委員会がやるべきことは将来へつなげるビジョンを描くことである。当事者の意見を聞き、議論して決めるべきというプロセスが必要であれば、本ビジョン上に記載することももちろん可能である。

検討委員会の場合だけでは判断しにくい話だが代替施設についても配慮する必要があるだろう。必要な考え方は盛り込んだ上で、我々は、検討委員会からの提案としてしっかりと打ち出すべきである。

○村井委員

フェンスで囲まれた空間であるということがイメージを悪くしている。確認のための質問だが、フェンスが造られたのはどのような理由か、やはりボールが外に飛び出さないようにするためか。フェンスがあるために囲われた空間となっていて、オープンスペースというイメージは出てこないし、限られた人だけが利用しているというイメージにつながっている。その問題の処理が大事ではないか。

○門内委員長

すごく大事な御指摘をいただいた。我々が子どもの頃は、野原を勝手に野球場にしたり、そこで盆踊りをしたり、他にも色々なことに使ったりしていた。確かにフェンスで囲われているという点はポイントかと思う。

○高木副委員長

野球場として整備する以上は、フェンスは必要かつ欠くべからざるものであったのだろう。実現のための課題はもちろん色々あるが、検討委員会として示すビジョンでは、しっかり議論した上で、こういう方向が望ましいと示すしかない。あれもこれも両方大事と書いては、それこそ訳が分からなくなってしまう。

○村井委員

災害時の避難場所として確保すべきという意見がたくさんあった点には注目したい。京都
会館の東側にも公園があり、災害時に活かせば良い。個人的な補足意見だが、こうしたオ
ープンスペースを活かし、近所の迷惑にならない範囲で東山を背景とした野外音楽場として
活用できないか。仮設の施設であれば景観を壊すことにもならないのではないかと思うが。

○柏原委員

野球場はせっかくあるスペースだから、このように活用したいという明確な具体案・必要
性がない以上、当面は現状の利用をベースとしたものになるのだろう。ただ、やはりフェン
スで囲まれている点は違和感がある。樹木で覆い隠すなどフェンスの存在感を弱める、また、
グラウンドの芝生化など、野球だけではなくサッカーや野外コンサートもできるような多目
的なスペースとして活用を少しずつ広げていけば、野球利用者以外の市民の納得性も高くな
るのではないか。

○門内委員長

まさに、空間、そして使い方をどのようにデザインできるかが鍵となってくる。オープ
ンスペースや広場は、世界中でも実に多様な事例があり、様々な可能性を秘めている場所であ
る。岡崎でのオープンスペース、広場のあり方については世界中のアイデアを結集してもい
いような取組になると思う。

○森本委員

柏原委員から非常に大事な御意見をいただいたので、応援したい。

門内委員長から世界には様々な広場があるとの話があった。例えば、イタリアのシエナの
カンポ広場では年に一度、全面に砂を敷いて競馬場として使っている。賭けをする競馬では
なく、各村自慢の馬が競争する祭りである。そうした事例を考えると、広場の役割・使い
方は固定的に考えない方が良い。「カフェ・レストラン」と例示するとイメージが引張られ
てしまうのかも知れない。広場としてのあり方や、緑の広がりやのあり方という点を強調した
方が良いのだろう。都心近くにあれだけまとまった空間は他にはなかなかないし、様々な使
い方・役割が考えられる。

○門内委員長

作業部会では途中「原っぱ」という概念も出ていた。『原っぱと遊園地』という本も出て
いるが、昔あった原っぱと、現在よくある造られた公園は明らかに違う。昔の原っぱとい
うのは、結構、多義的で様々な機能を持っていて、しかし、皆が何かしら楽しめていた空間で
ある。

単なる放置した原っぱでは雑草が生い茂っただけの空間になってしまうが、巧妙にデザ
インされていて、かつ、昔の原っぱが持っていたような柔軟性のある新しい「原っぱ」が描け
ると良い。

賑わい創出については、大規模なレストランではなく、訪れた方がちょっと憩えて、喉を
潤せるカフェ程度のものをイメージして書いたつもりだが、言葉は難しい。岡崎にふさわし
い広場のあり方を描くのは簡単なことではないが、世界中の人にアイデアを問えば、たくさ
ん集まるだろう。

○上村委員

確かに、文化・芸術ゾーンとばかり議論していて、スポーツの考慮が十分でなかった。思い出せば、かつては岡崎地域にスケートリンクもあって、スケートにきた帰りに美術館に寄ってという記憶もある。岡崎グラウンドは確かにフェンスの問題がある。一方、御所の中には、フェンスがなく、樹木で囲われた穏やかな雰囲気野球場もある。イサムノグチが千里山に原っぱを作ったように、皆がのんびり寄れる広場が欲しいという時代になっているのだろう。スポーツの視点は盛り込んでおいてほしい。

○門内委員長

今話した全てを成立させるのは難しいと思うが、のんびりと集えるハブ（拠点）のような場所が岡崎にあれば、世界中から人が集まり、色々な可能性も生まれてくる。

実は私なりに最終の文案を考えてきた。本日の議論を踏まえつつ、ちょっと読ませていただくので、原文と比較しながら聞いていただきたい。

（委員長から提案の修正文案）

「野球場とテニスコートとして利用されている現状の岡崎グラウンドは、岡崎地域の核として市民、来訪者がより幅広く活用・交流できる空間とすることが望まれる。

豊かな緑に囲まれた広々としたオープンな空間の中で、多彩なイベントや文化芸術活動、スポーツ・レクリエーションなどを楽しめる交流と創造のスペースとすることを検討する。また、周辺の景観と調和した来訪者が憩えるカフェ・レストラン・ショップなどの賑わいを創出することも検討する。

災害時の広域避難場所としての空間・機能を引き続き確保する。野球場・テニスコートについては、利用状況を踏まえて、代替施設の検討が必要である。」

当事者と調整した上での代替施設の必要性について盛り込んだ。また、訪れた方が楽しめるくらいのカフェとレストランは必要だとの想定である。また、広域避難場所としては、機能だけでなく空間も引き続き確保する趣旨も盛り込んだ。

○高木副委員長

全体趣旨としては賛成である。ただ、最初に「豊かな緑に囲まれた広々としたオープンな空間を前提に」などと「前提」をしっかりと明記してはどうか。後の文章で多少賑わい創出の話が出てきても、前提をひっくり返すようなことにならないのだな、と分かりやすくなる。

○門内委員長

今の高木副委員長の修正提案を踏まえ、本検討委員会のビジョンとして岡崎グラウンドの方向について最終文案をまとめていきたい。

これ以上踏み込んで、岡崎グラウンドの具体的なプランを描くことは、岡崎地域全体の将来ビジョンを描くという本検討委員会の役割を超えた内容になる。

（3）これまでを振り返ってビジョン全体について意見交換

○門内委員長

続いて最後の意見交換として、ビジョン全体について、あるいはこれまでの検討委員会の議論を振り返っての所感などお伺いしたい。

○南委員

今後の確認だが、最終ビジョンとして策定されたとして、市政の中ではどういう位置付け

になるのか。つまり、実行する場面においては誰が責任を持ってリードしていくのか。

○門内委員長

私が答えるべき質問ではないかも知れないが。ビジョンの最後に実現のためのプロセスを盛り込んでいる。これからのまちづくりは行政だけでできるものではないし、市民だけでできるものでもない。企業の手も合わせ、それぞれ協働で取り組んでいく必要がある。

そうした点で、現在、エリアマネジメント組織が非常に注目されている。個々の建物・施設だけではなく、様々な施設を含む地域全体をどのように管理して、どのように地域としての質を高めていくかがテーマとなっている。国土交通省でもマニュアルを出している。

私は「まちを育てる」という言い方をしている。まちを「つくる」というより、過去の人々が創ってきたまちを受け継ぎ、良いところを育て、次の世代へつないでいく、そのための主体を育てることが大事である。

例えば横浜市では、創造都市（クリエイティブ・シティ）という大きな政策を掲げ、これを運営するための「APEC・創造都市事業本部」を行政内部に横断領域的に作っている。まちづくりの主体をどう作るかが一番大きなテーマである。

岡崎地域では、誰か特定の一人、組織が担うのではなく、地域の人・施設、専門家、事業者、色々と動いてくれる岡崎ファンを結集して、というのが私の予想する姿である。

その他については、事務局で回答願いたい。

○奥部長

門内委員長の御意見にあったように、まさに多くの関係者の力を結集して、これからのまちづくりの試金石として取り組んでいきたい。また、ビジョン（案）の中には行政が取り組むべきこと、民間で取り組んでいただくこと、連携して取り組むこと、様々な方策を盛り込んでいる。現在予算を審議中であるが、エリアマネジメント組織の設立についても予算要求をしている。

○門内委員長

民間事業者が主導する東京の「大丸有（大手町・丸の内・有楽町）エリアマネジメント協会」とか、組織の作り方としては様々な形がある。京都岡崎に相応しい作り方があるだろう。

○村井委員

ちょっと議論が戻るが、岡崎のポテンシャルの中に、災害時の避難場所との位置付けを盛り込んでも良いのではないか。また、実現方策の書き方について、岡崎グラウンドのところだけが「あり方検討」となっており、他の方策と比較して明らかに書き方が異なっている。検討委員会が示すビジョンとしては「岡崎グラウンドの多様な活用」など、方向性を示したタイトルの方が良いだろう。

○太田委員

「神宮道の歩行者専用化」で想定しているエリアをもう少し明確に表現できないか。鳥居までだけか、三条通りまでかなど、神宮道商店街の中でも様々な受け取られている。

○門内委員長

抽象論、具体論の話になるが、現時点ではここだけ詳しく具体的に書くのも難しいだろう。今後、実現プロセスの中で決めていけば良い課題である。

○本多委員

本ビジョンが実現することを期待している。平安神宮としてもビジョンの中で何か協力していかなければと議論している。重要文化財にもなり、時代祭りとおわせて情報発信できるように考えている。

○柏原委員

こうしてまとまってくると、私が描いていた夢がかなり盛り込まれている。

京都には、既にたくさんの文化・観光資源がある。これらを活かしながら次の世代に向かって新しい何かを付け加えていくという作業が我々には必要である。

具体的には京都会館の再整備なども動いている。グラウンドの新たな活用や素晴らしい庭園群の活用など、岡崎地域が素晴らしい資源として多くの人に共感できるようなものにしていくことが必要である。今後、ビジョンの具体的な実現に向けても参画していきたい。

○門内委員長

ありがとうございます。大変、うまく締めていただきました。

実は、委員長として、ビジョンに「あとがき」を付けたいと考えている。委員長提案としてメモを作ってきたのでお配りいただきたい。

[追加資料：あとがき（案）読み上げ]

「21世紀に入り、わが国では人口減少、少子高齢化、低経済成長の時代を迎え、文化的な豊かさ、環境との調和、美しい景観、人と人との絆などを大切にする成熟社会にふさわしいまちづくりを展開することが大きなテーマとなっている。今日のまちづくりでは、行政とまちの主人公たるべき市民との協働、加えて企業・事業者の社会貢献が不可欠である。また、優れた都市の価値を発展させていくためには、単に保存か開発かの二者択一の考えではなく、貴重な地域資源を積極的に活用しながら、岡崎地域の魅力を将来へ継承し、創生していくことを着実に実践していかなければならない。

岡崎地域活性化ビジョン（案）は、こうした今日の社会状況を踏まえて、50年後、100年後を見据えた京都・岡崎の将来像を設定し、地元の住民や施設関係者はもとより、広く市民、企業、行政などの関係主体が協働して取り組むべきまちづくりの羅針盤として検討を進めてきたものである。

ビジョン（案）は、多くの意見やアイデアを出し合い、議論を積み重ねて作成したものであるが、そこにはすぐに着手可能なもの、中長期的な視点で取組を進めていくもの、既存の運用・制度を見直す必要があるもの、大きな財源が必要となるものなど、様々な内容が盛り込まれている。今後、エリアマネジメント組織の設立などとともに、実現のための方策を着実に推進していくためのロードマップづくりにも鋭意取り組んでいく必要がある。

また、パブリックコメントなど多くの方々から寄せられた意見やアイデアはまさに叡智であり、事業化に当たっては積極的に活用を図っていくことが望まれる。

岡崎地域は、東京遷都によって衰退した近代における京都の危機を乗り越える牽引力を発揮し、時代を先取りする形で進化を遂げてきた地域である。こうした岡崎の進取の精神に則り、当ビジョンについても社会の変化に臨機応変に対応し、時代を先取りするように、絶えず「進化し続けるビジョン」として大いに活用いただくことを願って止まない。

最後に岡崎地域活性化ビジョン（案）の検討・作成に当たって、幅広いご意見をいただいた検討委員会委員各位、実務ベースで検討をいただいた京都市のプロジェクトチーム、そして貴重なご意見・アイデアをいただいた岡崎を愛して止まない多くの市民や関係者の皆様に改めて心から感謝を申し上げたい。」

このような趣旨のあとがきを考えている。修正の御意見などあれば、また後ほどお教えいただきたい。

○大島委員

仕事上、団地マネジメントに携わっている。先日エリアマネジメント組織に関わっている人達の交流会に参加してきた。エリアマネジメントには六本木ヒルズ等の商業施設エリア、密集市街地改善など国内でも様々なテーマがあるが、岡崎で取り組もうとしている地域の文化力を向上・発信していこうというものは、全国でも稀であると思う。京都のまちづくりにおいても象徴的な取組であり、また、全国的にもモデルになっていく展開にちょっとワクワクしている。

○門内委員長

たくさんの御意見ありがとうございました。

本日の御意見を踏まえ、最終案の取りまとめについては、委員長に一任をさせていただくということによろしいか。

——（一同 了承）——

では、最終案については、私の方で責任を持って取りまとめ、委員の皆様へ送付した上で、京都市へ提出をしたい。

○三科課長

委員の皆様、本日は、活発な御議論いただき誠にありがとうございました。本日の議論を踏まえ、門内委員長の指示の下、最終案を取りまとめて参る。

最後に、検討委員会の閉会に当たりまして、門内委員長から、御挨拶をお願いしたい。

○門内委員長

各委員の皆様には、お忙しい中、お集まりいただき、誠にありがとうございました。私自身、岡崎地域について非常に深く学ぶことができ、ある意味、大変な役得だったかなと思っている。

今まさにこれから始まろうとしているところである。

途中でも何度か申し上げたが、やはり21世紀の日本社会は、人口ピラミッドを見ただけでも、大変な状況を迎えている。しかし一方、アジアに目を広げると一最近、私はアジアメガシティなども研究しているが一ものすごい成長をしている。この間、シンガポールも視察に行ったが、ものすごい規模のMICE拠点ができていたりする。

こうした世界の動きの中で、京都岡崎も考えていかななくてはならない。つまり、京都の中だけではなく、世界の中で岡崎がどういう価値を持つか考えていく必要がある。そういうグローバルな視点の中でこそ、実はローカルなものが大切になってきている。ローカルな地域の資源を活かし、グローバルな世界の中で、価値を持てるような地域にしていくこと、これが大きな課題となっている。これは、個々の建物・施設ではできない。つまり、「エリア（地域）」という広がりの中で考えないといけない。地域という単位で考えた時、一人では実現できない。住民だけでもできない、行政だけでもできない、企業だけでもできない。市民セクター、行政セクター、民間セクターなど、様々な立場の人達の力をどのように組み合わせていくかということが、都市・まちを創っていく上で非常に重要になってきている。こ

の協働の形態を実現していく仕組みとして注目されているのが、「まち育て」であり、「エリアマネジメント組織」だと考えている。

京都岡崎における取組が、このエリアマネジメントの新しいモデルになると思う。私も東京に30年ほど住んで、京都へ戻って来て感じたが、京都のように、市民が積極的にまちづくり、まち育てに参加してくれる地域は他にない。京都が誇るものとして、美しい景観、豊かな文化財・地域資源があることは確かであるが、やはり、そこに住んでいる人々が一番大事な財産である。豊かな人材、ソーシャルキャピタルを抱えた京都で、新しいまちづくりができなかったら、日本として困るという事態になるであろう。岡崎地域が活性化することで京都全体が良くなり、日本全体も良くなっていくことを期待している。そういう方向を示すビジョンが、皆様のお陰で描けたのではないかと考えている。

これから、岡崎地域の活性化への取組がスタートをする。是非、皆様にもご参画いただき、末永く見守っていただきたい。

長い間、誠にありがとうございました。

4 閉会